



私の保育

鈴木知子

五月十八日

一週間ほど前、M子から「せんせい、わたしの大五郎もらってくれない？」ふいに声をかけられ、驚いた。「あのね、おばあちゃんにかつてもらったヒヨコのなまえが大五郎っていうの」「オスなんだよ」「うちのおかあさんもおとうさんも、大きくなったからおうちにおけないっていうの、だから、困っているの」「せんせい、幼稚園につれてきていいですか」

少し理解できた私は、「Mちゃん、大五郎が幼稚園に
いるとうれしい？」と聞いた。M子はすかさず「うれし
いよ」と、答えたあとで、「ほんとうは、おうちにおき
たいんだけど、マンションではおけないから、だれかに
あげなくちゃいけないの、かわいそうな大五郎だね」大
五郎の行くえを心配して尋ねる子に同情した。「それじ
ゃ、やなぎぐみで育てようか」「せんせい、ほんとにい
いの、せんせいありがとう、わたし、一生懸命お世話し
ます」。ひとりっ子で、なかなか友達に恵まれなかった
M子だが、積極的に自分の意志を伝えたり、友達の中
ですすんで入りこめる。大人の会話にも敏感で、両親のや
りとりを見聞きしては心を傷めている時もある。

「せんせい、いちどおうちに帰ってから大五郎をつれて
きます」「よろしくおねがいます」「まだ、小さいから
ダンボール箱にいれてるの、寒くだけしないでね、おう
ちの中においといたから、寒いと風邪ひいちゃうでし
よ」「きれいな水を時々とりかえて、えさは、わたしが
もってきます」飼い方まで教えておかないと、と心配す

るM子の表情は、まるで大五郎の母親でもあるかのよ
うな心づかいである。「はい、わかりました」

安心したのか、スキップで外にでかけていった。

その午後、母親と一緒に、少しトサカがみえるように
なったヒヨコをつれてくる。

ピヨピヨと、鳴くかん高い声を少し押さえるかのよう
にして、「せんせい大五郎です。よろしくおねがいしま
す。えさは、この袋の中に入っています。このお皿にあ
げてください」赤くふちどりされた灰皿をお皿にして
いる。「抱く時は、このタオルに包むと気持よく寝ます
から」クリーム色のM子の大好きなタオルを大五郎の
毛布代りにおろしたらしい。母親は、ただ「すみませ
ん」を繰り返す。M子の方が、要領よく説明をしてい
る。そして、最後に「夜はひとりぼっちなのね」と、つ
ぶやく。「だいじょうぶよ」、「兎のクロちゃんも、ミー
ちゃんもいるじゃない、みんなお友達になっちゃうわ」
「そうだね、クロちゃん、ミーちゃん、よろしくね」心
残りがあろうだが、「またあしたね」と、手を振るな

がら帰って行った。M子は大五郎を救うために必死だったのだから。少しでも孫の気持を満してあげようと買つて与えたおばあちゃんは、ヒヨコの先々まで予測することはできなかつたらしい。M子は大五郎を通して、生きものを育てることのむずかしさも味わつた。

こうした体験から、「どうしてヒヨコがいるの」など、クラスの子どもの達の質問にも、すすんで説明をするM子であつた。昨年、同じようにして兎のクロをつれてきたY夫は、「ぼくだつてクロをつれてきたんだよ、ね、せいせい」と、思い出したように話す。

子ども達の仲間に、観察用に、として保育の中にとり入れられるものもあるが、前記のように、不意にとびこんでくる例も少なくない。幼稚園で、これ以上は、と体裁よくお断わりすることもあるが、子どもの気持を知ることが故に、断わりきれない場合が多い。

子どもの理解者として、情緒の安定や活動の取り組み方などに効果を上げるものであれば……と思えばこそ、飼育のむずかしさを問うことより、受け入れることの方

の大切さを選んでしまふ。「生きものを通して、何が育てられるのか」と、聞かれることもある。形として、すぐ効果を望むのは無理であるが、日常生活に喜怒哀楽があるように、生きものの情感までを観察できる子ども達もいる。

「うさぎの耳は、こんなにあつたかいよ」、陽ざしの強い所に置きざりにしていた兎を見つけたO子が、「せいせい、クロちゃん苦しそうだよ、日射病になっちゃやよ」と、動悸の激しいように驚いて教える。

「きうはニンジン喜んで食べたのに、今日は食べないね、リンゴの皮の方がよく食べるね」——「ウンチがやわらかいね、わたしもきのう下痢してたの、ミーちゃんとおなじよ」——「せいせい、この頃大きくなったと思わない、もしかしたら、赤ちゃん生まれるかもしれないよ」——「せいせい、クロちゃんのお誕生日はいつ、何才だっけ、お誕生会してあげなくちゃ、」など。動物を介しての会話もかなりみられる。食べ物の好き嫌い、食事の量、同じ動物でも性格の違いまでわかつてくる。絵本

や図鑑では知り得ない体験学習をしているに違いない。

大五郎がきた翌日、友達同志の衝突があった。身仕度を整えて、すぐ大五郎を手にしたM子が、ままごとをしているA子の所に行つて、「かわいいでしょう」を連発したために、A子は、「兎のミーちゃんの方がかわいいものね」と、いう。「大五郎の方がかわいいよ、私の弟なんだから」……しばらくこうしたやりとりのあと、保育者に「せんせい、どっちの方がかわいいと思う？」と聞く。「クロちゃん、ミーちゃんは、ずーっと幼稚園にいるから、よく慣れてみんながかわいいと思つていましょう。先生もかわいいと思うよ」「じゃ、大五郎はかわいいくないの」「大五郎は、からだも小さいし、お目目も鳴き声もかわいいわよ、だけど本当にかわいいと思うのは、これからじゃないかな、M子ちゃんは、本当の弟のように優しく育ててきたからかわいいのよね。今度は、M子ちゃんの弟ではなくて、やなぎぐみのみんなの大五郎でしょう？ みんなにかわいがつていただきまし

よう。そうすると、本当に大五郎ってかわいいね、っていうわよ。「そうか」——本当の可愛いさが、形や動きだけではわからないことを理解させたい。

「ぼくは、ニワトリは弱いんだ。だって突つつくんだもの」と、近よらなかつたS夫も羽ばたきまわったり、肩に乗っている大五郎をみて、指先で背を触れてみたりしている。

一方では、カメを水槽から出しては、「ちよつとおさんほに」「運動させてやるんだ」と、中庭や積木で作つた家の中につれた。一年間水槽に手を入れることがなかつたK男が、年長組になつてから、よくカメに親しみを持つようになった。どじょうつかみにも、歓声をあげている。タニシは、どじょうと同居しあいながら、次々と子を増やし、にぎやかな家族関係を保っている。私は重い水槽の水をとりかえる度に、生きものの強さ、尊さ、神秘的なものを感じる。

五月十一日

段ボール箱を利用して、D夫は手動式飛行機を作った。ロボット式につばさをつけ、ひもを肩につけて歩ける飛行機。これが女兒にも人気があって、「Dちゃん、わたしにのせて」と、集まる。D夫は、気持よく「いいよ」と、順番に乗せる。このD夫の刺激で、段ボール箱製作がはじまった。

兎に、全く関心を示さなかったN夫が、開閉つきのドアをつけ、屋根を傾斜させ、家を作った。「せんせい、ミーちゃんのうち作ったよ」と、いう。そして、兎は嫌いだよ、と言っていたB夫は、段ボールの家の中に暗室を作り、寝室や、食事する部屋、トイレ、遊ぶ所などと、細かく仕切る。楽しい生活を、という発想だ。自分のためではなく、兎のために、という一念で作ったものだ。

実際に兎を入れてみると、いろいろな不向き、動きにくさに気付いた。そして、すぐ直しにとりかかる。かな

り、保育者に援助要請（カッター使用などで）もあったが、子ども達の設計、施行には、喜んで手を貸した。発明工夫が、どれだけ人や生き物に役立つものであるかを、よく知らせたかった。

「せんせい、やっぱり、木で作らないと無理だよ、兎はウンチやオシッコもするでしょう。段ボールは紙だから、すぐだめになっちゃうんじゃない？」材質の選択も大切だと気づく。「土を掘るように、ガチャガチャしてよ、やっぱり土が欲しいのかなあ！」

少しでも兎に生活の変化を持たせてやったり、楽しませてあげたいと考えたN夫やB夫から気づかされたことがある。「ぼくは動物は嫌いなんだ」と否定的だった子でも、また、絶対に触れようとしなかった子でも、本当は、暖かい、思いやりを持っているのだ、ということがわかった。接していることだけが可愛がっていることではないことを、子ども達から学びとることができた。

「ありがとうNちゃん、ミーちゃんも、Nちゃんありがとう、Nちゃん大好きだよっていつてるよ。」「ほんとか

なあ！」「ほく、今度はもっと大きな箱をみつめて作ってあげるからね。」一人ごとのようにつぶやくN夫。同じようなことがB夫の口からも聞けた。そして次は、大工さんのように木で作りたいことも考えている。保育者もそれに共鳴している。

生き物を扱うことの中で、衛生面、健康面を、と心配している父兄もいる。しかし、特別悪いいたづらや、危険な扱いをしなければ生き物の方もむやみに突っついたり、かんだりはしない。可愛がる子の感触は、動物の方が早く察知できることを知らせたい。

* * *

ある時は、生き物の気持を代弁しながら、子ども達に細やかな心づかいを促がしたり、幅広い視野を育てたいと願っています。

生き物との自然な対話が、心を和ませたり、理屈では解せない情感による対話の中に、本根を出しあう、生命

の豊かさが存在するのではないのでしょうか。

ささやかな環境作りだと思いますが、こんな所にも何かを見いだしたい気持で、今朝も早起きしてでかける私です。

(郡山女子大学附属幼稚園)

